



自然景観を活かした整備事業が進められている栗山川

“次代へつなぐ豊かな水辺”

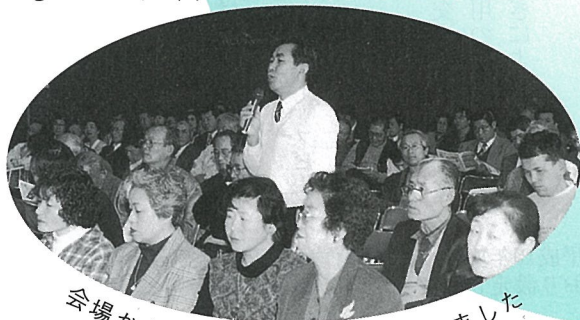
栗山川シンポジウム開催

3月15日(日)、横芝町文化会館で“次代へつなぐ豊かな水辺”と題した『第2回栗山川シンポジウム』が開催され、横芝町・光町の栗山川の環境問題などに関心のある方々約250名が、魚類に関する調査報告や基調講演に耳を傾けました。

「サケの帰る南限の川」として知られる栗山川は、昔から「フナ」や「ハゼ」など淡水魚の宝庫。このほど、県から委託された民間コンサルタント会社が生物調査を行ったところ、このほかにも「モツゴ」や「メナダ」「タモロコ」など、なんと67種類もの魚が生息していることが判りました。また、「カワセミ」や「アオサギ」など鳥類の生息数も多く、私達の身近な川が生物学的にも大変貴重な川であることが、今回の調査報告で新たに判明しました。

報告に続き、印旛沼の環境基金主任水質研究員の白鳥孝治先生が「人は一日に250リットルの水を使うが、飲み水とするのはわずか1リットル程度で残りは物を洗うためのもの」と現代人の水の無駄遣いを指摘。「古村の生活を手本として水に感謝する気持ちを持たせ、川もそれほど汚れなくなる」と、生活排水対策などについての基調講演を行いました。

最後に、千葉工業大学の高橋教授が座長となった意見交換が行われ、会場からは将来の川づくりの要望や質問など、予定時間を越えても熱心な意見が飛び交うほどの大盛況のシンポジウムとなりました。



会場からは熱心な意見が飛び交いました

サケの帰る川 “栗山川”

大総小の五年生がサケの稚魚を放流

3月14日、水産資源の確保と栗山川の環境美化運動の一環として、10万尾のサケの稚魚が、大総小学校と日吉小学校(光町)の5年生49名の手によって、横芝堰から放流されました。

栗山川はその昔、淡水漁業でにぎわいをみせていましたが、時代とともに川の汚れが進み、水面をはねる魚達の数も年を追うごとに減少してしまいました。そこで当時の関係者が「きれいな川にしか棲めない」と言われている「サケ」が回帰できるような川にしよう」と浄化運動を展開。県水産部栽培漁業課や県内水面水産試験場の指導のもとに、昭和51年に初めてサケの稚魚を放流しました。



子どもたちにも栗山川の環境問題を考えてもらおうと、毎年行われるサケの放流



子どもたち放流について説明を受ける

当初は、本当に帰ってくるのかどうか心配したそうですが、昭和55年に回帰が確認された時は、関係者はもとより全町民が大変喜んだそうです。その後、子どもたちに栗山川の環境問題を考えさせてもらおうと、毎年、横芝町と光町の小学生の手によって放流が行われています。

今年放された稚魚が3、4年後にたくさん回帰できるように、私たち一人ひとりが栗山川を汚さないように心がけましょう。